

随 想

フジコー技報12号によせて

『1%のひらめき』

(財)北九州産業学術推進機構
中小企業支援センター・研究開発部
担当部長

村井達典

Tatsunori Murai



私とフジコーさんとの最初の出会いは、住友金属小倉時代でした。住友金属小倉では、フジコーさんに焼結機のクラシャーの歯の補修や高炉のベルの補修など、ハードフェーシング溶接肉盛技術でたいへんお世話になりました。製鉄所全体でも、その抜きんでた保有技術と機動性で、製鉄所の発展に貢献していただきました。

中小企業支援センターは、その前身は平成2年に設立された(株)北九州テクノセンターでした。平成14年4月から(株)北九州テクノセンターの公益的事業の部分だけが(財)北九州産業学術推進機構に譲渡され、機構の1センターとして機能しています。これまでの間、北九州地域の企業の方々に活用していただきましたし、支援をしてきました。そして、私はここで短い間ではありますが、企業の技術開発支援に携わってきました。その仕事の一環で、またフジコーさんの「技術開発センター」との御縁ができて、大変うれしく思っています。

北九州市は、ご存じの通り鉄鋼や化学などの基礎素材型産業を中心に発展してきました。また、それらに関連した企業群の技術ポテンシャルは非常に高いものがあります。つまり優れた技術、幅広い人脈でつながった企業が集積した街です。しかしこの基礎素材型産業は、円高、新興工業国の台頭で「鉄冷え時代」以降縮小傾向にあります。

この傾向に歯止めをかけるべく、地域が有する強み「高度な知識と技術」を核として、産業を創出、育成し、新しい「モノづくりの街」を目指して北九州市は頑張っていますし、企業の皆さんも発展・存続を懸け、研究開発を含め幅広く事業活動をされています。その製品開発・技術開発において、その成果をお客様に早い段階で受け入れていただくために

は、進め方において重要なポイントがあるのではないかと思います。

まずアイディアの生まれ方ですが、2つのパターンがあります。1つは、個人・研究者が係わってきた基盤技術・知識の中で生まれてきた知的・シーズ的アイディアであり、もう一つは、会社がもっと事業を大きくしたい(社会的貢献をしたい)という目標の中から、お客様の要求を嗅ぎ取り、自分のもつ技術・市場を軸足にして生まれてきた経験的・ニーズ的アイディアであります。これらはその後の研究開発の進み方・速度に大きな差が出てきているように感じます。

過去の北九州市の産学官研究開発事業を調査させていただいていますが、企業発案(ニーズから生まれたアイディア)の研究開発は時間的な進捗は別にして、総じてうまくいっているように思われます。やはりユーザーとの距離の近さが、研究開発の熱意になっているのではないのでしょうか。

アイディアが社会ニーズと合っているのか十分な調査が必要です。マーケットの特徴・大きさ、競業他社との客感的比較、ラボ的研究開発・試作での方向性確認、知的財産の調査、出願がなされなければアイディアは生きてきません。ここが不十分なため、研究している目的が少し的はずれになっていてユーザーに受け入れられない、売れない事例をみたことが幾度かあります。つまりユーザーニーズと違うところで研究をしているため、折角出来上がった研究の成果が利用されないということです。「この研究の成果は基盤技術として今後活用される。」と言い訳をして研究開発事業は終止符を打つことになってしまいます。それまで費やした時間と労力は何だったのかと疑問を抱かざるを得ないこともあります。段取り八分でいい仕事か否かに分かれると思われれます。

次は研究開発ですが、自分達が抱いてきた夢を形にするときでありますので、そこに必要なのは実現したいという熱意、執念だけだと思われれます。その時も研究テーマの出自が問われ、ニーズからスタートしたものは確かに研究者の思いが強く、そして諦めがないため研究成果に繋がりがやすいと感じています。

そして開発からスケールアップ、販売の段階に入るのですが、これからが正念場です。よく言う「死の谷」というのもここからのステージなのだと思います。人に理解して貰い、喜んで使っていただく迄に相当の時間が必要です。営業力が問われるところですが、中小企業は概して人、物、金が少ない。ここで行き詰まっておられることが多く見られます。ここでも必要なのは会社の熱意と執念であり、そのエネルギーが手段や方策を生み出し、突破口になるように思われれます。毎週楽しみに見ているTV番組「プロジェクトX」では、プロジェクト担当者方々の熱意・執念に本当に敬服してしまいます。

「天才とは、1%のひらめきと99%の努力の賜物である」これは発明王・エジソンの言葉ですが、一般的には「あの発明王のエジソンですら、努力の大切さをいっているのではないか。やはり人は才能ではない、努力こそが大事なのだ」と解釈されていま

す。しかし彼の日記には「最初のひらめきがよくなければ、いくら努力しても無駄である。ひらめきを得るためにこそ努力はすべきなのに、このことをわかっていない人があまりに多い」と書かれています。

お客様、社会のために何かいいものを作ってあげたいと常に考えているときに、研究において行き詰まり悩んでいるときに、苦労努力しているときの一瞬にひらめきがあって、それ以後うまくいったという話はよく聞きます。成功の裏側には大いなる失敗や苦労が山積しているのであろうことは、容易にうかがえ、またこの過程がなければ成功へのひらめきはありませんということでしょう。

創業40周年で技術年報「創る」を創刊され、そして50周年では「技術開発センター」を設置されまして、フジコーさんには研究開発・技術革新に対する並々な熱意を感じます。技術は重要な経営資源です。60周年には、どんな技術が開花し、会社はどのように発展・活躍されているのでしょうか。今から本当に楽しみです。

北九州の技術開発の成功パターン・ケースが、(財)北九州産業学術推進機構との連携の中で出来上がったなら、誠に仕事冥利に尽きるといえます。